

貞方敏郎先生追慕

貞方敏郎先生が他界された5月3日から算えて、早や半年以上もたってしまった。われわれの英文学研究室のフロアに、もう足どり軽快なあの先生の姿が見られぬようになってから久しい。独特のウィットにみちたあの先生の談話が聞けなくなってしまってから久しい。寂しいことである。それにも増して、先生を失ったことによって、われわれの英文学科の英語学、言語学の分野で中心の柱を失ってしまい、そこにぽっかり大きな穴があいてしまったことは痛恨の極みである。

先生と同志社とのかかわりは、先生が、同志社中学に入学された1923年にはじまっている。そして先生は1980年、69歳で逝かれるまで、終始、同志社の生徒であり、学生であり、先生であり、教授であり続けられた。実に先生の生涯は、その殆んど全て、同志社とのかかわりにおいてあったのである。わたしの知る限り、先生のご住居も、常に同志社のキャンパスから至近の距離の所にもありました。そして今先生のお墓は、キャンパスのすぐ北の、相国寺内、大光明寺にある。

先生とわたしとの個人的なかかわりについて書けばきりもなく、また告別式の日には、その大要を、心の整理もつかないままに、弔辞として述べさせていただいたが、それらをここにくり返すことはすまい。唯、要約していえば、先生は英語学者としてわたしのよき師であったし、先生と全くといっていいほど性格を異にするわたしには、40年近くも、近い後輩として接して来た先生の言と動は、わたし自身の言と動に強い反省を強いることしばしばであった。先生と共に音楽の好きなわたしには、先生と音楽談義をすることは、わけてもシベリウスについて語り合うことは、とても楽しいことであった。併しこのわたしも、先生を追慕する、実に多くの、先輩、友人、教え子たちの内のたった一人ではかない。われわれの深い追慕の気持が集って、ここに一誌を編んで謹んで

先生の霊に捧げる。

先生はチェロの達人でもあった。この追悼号は、チェロの楽曲の鳴り止んだ後に聞えてくる虫しぐれとでもいうべきであろうか。

天上の霊 しばらくは 聞き給え

1980年 晩秋

同志社大学英文学会会長 木 村 俊 夫